10月17日感想

「安野 中国人受難之碑」建立10周年記念集会に参加して

田浪 亜央江

郵送されて来たチラシを手にとり、「碑と向き合う」というタイトルが目に入った瞬間、これは絶対に参加しなければならない集まりだと感じた。昨年参加させて頂いた「和解10周年」集会に引き続く集会というだけではなく、個人的に感じていたことに、言葉を与えられたような気がしたからだ。

昨年の春先、はじめて安野を訪れて一年余り。安野との関わりは、ゆっくりと続いてきた。今年7月には、勤め先の大学の授業の特別講師として川原洋子さんにおいで頂き、オンラインのかたちではあったが、安野での中国人受難の経緯と和解について、おもに一年生である74人向けに講義して頂いた。そのなかでの私自身にとっての新たな気づきの一つが、安野に建てられた碑の意義だった。安野をはじめて訪れたときの私の関心の中心は、まずは強制労働の実態を知ることにあり、あとから思えば、碑と「向き合う」には至っていなかったと思う。現場での最初の訪問スポットであった碑の前で写真を何枚も撮り、その時は丁寧に「見た」つもりだったのに、実は何も見ていなかったのではないかとさえ疑い始めていたのだ。

会場ぎっしりの参加者を集めた昨年の集会と様変わりし、広めの会場でスペースを空けて指定された座席に着席する(運営上の御苦労は相当なものだったと思う)。冒頭、司会の杉原達さんによる、和解から碑建立までの経緯と、碑の意義に関する簡潔で明瞭な説明。私がここで改めて確認したのは、安野の碑が強制連行された受難者360人全員の名前を刻んだもので、強制連行の歴史事実と和解の経緯を後世に伝えるための記念碑だという点だ。

あとの発言で弁護士の内田雅敏さんも言われてい たことだが、碑の制作と据付け作業を行った石材店 社長の吉村政則さんが発言され、しかもそれが通り 一遍の挨拶ではなく、ひじょうに心に沁みる内容で あったこと。この会が、さまざまな人と丁寧に関係 を取り結んで来たことを裏付けているのだろう。加 工石としてはこれまで扱ったことのないほどの大き さの石に、日本では普段使われない何種類もの漢字 を、それも絶対に間違ってはならないという緊張感 のなかで刻み、その石を普段使わない高所作業車を 使って据付ける。…お話を伺いつつ写真を見ると、 その作業の様子がありありと目に浮かぶ。吉村さん は、あくまでプロの石屋としての矜持と責任感から このお仕事に関わり、無事に終えた。しかしその安 堵威や満足威で完結するのではなく、その後は毎年 集会に参加され、中国人強制連行と和解の経緯につ いて学びを深めているというのだ。これはたいへん 示唆的なことだと思った。

数少ない存命の受難者の一人として、碑に刻まれた自分の名前を見つめる人。連行された祖父の刻まれた名の上に自分の手のひらを重ね、指先でなぞる人。父の名前に額をつけて追悼する人。吉村さんのあとに伺った川原さんの報告では、和解という出来事を象徴する「碑」を前にした受難者や遺族たちの表情や身体がスクリーンに映し出されてゆく。

話の進行につれ、改めて冒頭に指摘された、安野に建つこの碑の独自の特徴や意義を、自分なりに受け止め整理する必要を感じ始める。安野の碑は「日本で死亡した人を追悼・慰霊するために建立された追悼碑や慰霊碑ではない」という冒頭の杉原さんの整理を、私は自分の文脈に引きつけて受け取っていた。宗教との関わりを無視できない「慰霊」に対し、

「追悼」は無難な言葉に聞こえるが、しばしば国家 が主体となることで、故人との固有の関係性におけ る悼みを簒奪したり、追悼する者としない者を政治的に分別することがある。パレスチナ問題に関わってきた関係で、イスラエルの虐殺によるパレスチナの死者をただ静かに「追悼」することと、イスラエルの責任をあえて問おうとしない政治的判断が繋がってしまう場面を私は長年目にして来た。そのため追悼という言葉に、どうしても用心しながら接するしかない。

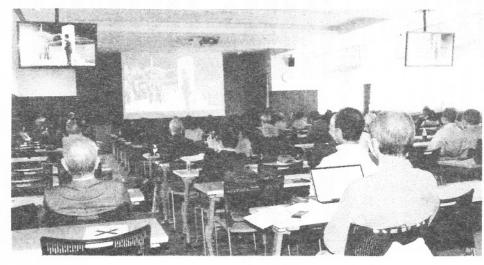
しかし安野の受難者や遺族にとって、碑は何より もまず、仲間だった労工や自分の肉親を追悼する場 所だろう。安野の地で亡くなったか否かを問わず、 彼らがこの地に連れて来られ受難した証を碑に刻ま れた文字によって確かめ、その苦難を思う。じゅう ぶんに、心ゆくまで追悼することを通してこそ、受 難者の尊厳を確認し、気持ちに区切りをつけること が出来たのではないか。そんなことを考えながら、 私は川原さんの報告の後半部分の、受難者や遺族の 言葉を伺う。「記念碑によって、(中略) 悲惨な歴史 を絶対に繰り返さないだろうと確信しています」、

「碑は受難の碑ですが、これからは友好の碑になるだろう」。追悼のプロセスを経ることによって受難者や遺族たちは、碑のもつべき役割をこのように社会的に、また将来に向けて捉えはじめたのではないか。

室田元美さんは、秋田県の花岡や静岡県西伊豆町 にある中国人殉難者の「慰霊碑」、京都府の大江山ニッケル鉱山の「供養塔」など各地の強制連行碑を紹 介された。碑について当初「単に歴史を記録するもの」だと思っていた室田さんは、取材を通じ、一つ一つの碑に結実した「犠牲者の悲しみにはせる思い、二度と過ちを繰り返さないようにと誓う多くの人々の思い」を知った、とまとめている。日本に強制連行された人々の受難の事実を知り、その苦しみを思い、彼らを追悼すること。このこと抜きに、この日本社会で暮らす私たちの責任への自覚や、後世に伝えてゆこうとする意志も生まれないだろう。

最後に発言された内田さんのお話のなかではまず、戦後直後の碑から安野の碑の時代まで、中国人受難者の碑の性格がどのように変わって来たかが整理された。そして内田さんは、追悼碑に不可欠なものとして、とくに個々の被害者の名前を刻むことについて強調された。その方法は石を刻むことに限られず、シベリア抑留被害者4万3千人の名前が47時間かけて声に出して読み上げられた例や、死者一人一人について膨大なデータを収集した澤地久枝の労作の例がある、との指摘は印象的だ。

私自身が碑と「向き合う」ことを、次に安野を訪問した時の課題のように考えていたが、そうではない。安野の受難者一人一人の名前、そして判明した限りでの彼らの人生と受難については、和解事業報告書をはじめ、さまざまな資料が私たちの手元にある。この文章を書きながら、久しぶりにそのページをめくった。これからもきっとめくり続けるだろう。



「安野 中国人受難之碑」除幕式の 映像をみる集会参加者 (10月17日 広島弁護士会館)